名品続々！　教科書を彩る学習院コレクション

伝応神陵古墳出土水鳥埴輪

嘴峰と尾を欠損しているが、ほぼ完全な形の水鳥埴輪である。高さ 42.8㎝。器面はハケメ調整で、頸部から頭頂部にかけてユビナデを施す。大きさや類例などから、ガンカモ科の水鳥を模したものと考えられる。

昭和 24 年（1949）当時、「畿内某帝陵出土　水鳥埴輪」というラベルが添付されていたという。学習院では、明治 20 年（1887）頃から白鳥庫吉を中心に歴史地理標本の収集に着手しており、大正 2 年（1913）から『標本原簿』（歴史）への台帳登録が始まった。しかし、『標本原簿』（歴史）に本埴輪の記載がないことから、明治年間には学習院に収蔵され、国史などの教材に供されていたのであろう。

明治期、古墳から発見された遺物は陵墓治定の関係上、宮内省諸陵寮で処分することとされていた。そのため、明治 22 年（1889）に応神陵（誉田御廟山）古墳の周濠から出土した水鳥埴輪は、宮内省諸陵寮に帰属され、出土遺物が一括して東京帝室博物館に引き継がれたのは、明治 45 年（1912）になってからであった。「畿内某帝陵出土　水鳥埴輪」が、学習院の歴史標本となり得たのには、明治 38 年（1905）第 9 代院長に就任し、その後宮内省諸陵頭や宮中顧問官を歴任した、山口鋭之助の関与が示唆される。

華族子女の教育機関として逸早く歴史教育の必要性を認識し、宮内省所轄の官立学校であった学習院を象徴する標本といえよう。

茨城県立木貝塚出土　深鉢形土器（模型）

口唇部に刻目を有する波状口縁の深鉢形土器で、体部全体に縄文を施した後、ヘラを用いて区画線を描き、区画外を磨り消す磨消縄文の手法がみられる。高さ 29.3㎝。ドルメン教材研究所が昭和 25 年（1950）頃に製作及び販売していた『古代土器複製標本』第二集（後期・晩期縄文式土器）のうち、縄文時代後期の加曽利ＢⅡ式の標本模型である。当時中等科長であった児玉幸多により、第一集（弥生式土器）と第二集が購入され、阿方式甕形土器を除く 12 点が現存する。

標本模型の原型は、益子焼の陶芸家、濱田庄司が手掛けたもので、製作にあたっては、実物資料の精緻な観察や、山内清男ら縄文土器研究者の助言があった。そのため、粘土の調合にはじまり、輪積成形、磨消縄文の手法など、縄文土器研究で解明されていた製作方法を忠実に再現している。焼成温度が高く、肌触りが実際の縄文土器とは異なるが、標本の悪用を防ぐため、焼成前の底部に窯印「D」が押印された。

ドルメン教材研究所は、戦後、学校教育に考古学が必要と考えていた藤森栄一によって設立されたもので、杉原荘介や後藤守一、芹澤長介ら、明治大学考古学研究室を中心に、その趣意に賛同した多くの考古学者が参画している。そして、濱田庄司や島岡達三ら、益子焼の陶工の技により、実物資料と見紛うばかりの標本が完成した。

戦後、学校教育における考古資料教材を理解する上で第一級の標本である。　（東京都教育委員会　平田　健）

昭和 25 年頃
ドルメン教材研究所製作

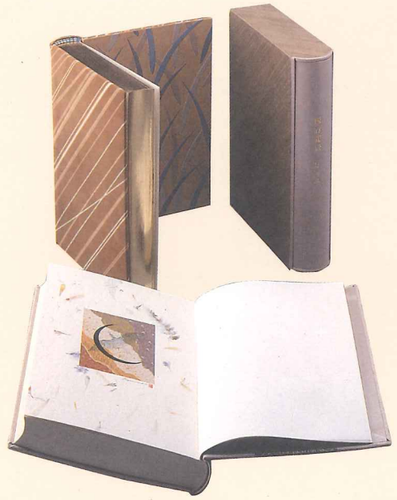
辻邦生と『西行花伝』

『背教者ユリアヌス』や『春の戴冠』などの長篇歴史小説を得意とした作家・辻邦生（1925-1999）は創作活動の一方、昭和 31 年（1956）より約 35 年間学習院大学フランス文学科（現フランス語圏文化学科）で教鞭を執った。当館では自筆原稿、創作ノート、日記など約 4 万点を所蔵している。

以下の資料は辻が晩年に発表した『西行花伝』の稀少本である。同作は平成 7 年（1995）に第 31 回谷崎潤一郎賞を受賞しベストセラーとなった。西行（1118-1190）が蹴鞠に興じる場面は殊に評価が高く、その精確かつあざやかな描写は井上ひさし、丸谷才一らも賞賛している。

1972 年パリにて

私家本『西行花伝』（装幀：柄澤齊、製本：大家利夫　鹿燻革表紙 仔牛革モザイク見返し装、口絵（木口木版画）限定 5 部）



撮影：上野則宏、写真提供：栃木県立美術館

装幀の柄澤齊（1950-）は木口木版画の第一人者。細密で時空間や生命の広がりを感じさせる作品は版画のみならずコラージュやオブジェ、絵画など多岐にわたり高い評価を得ている。また、『ロンド』『黒富士』など小説家としても活躍する。

製本の大家利夫（1949-）はフランスで修業を積んだ製本家。レリュール（フランス伝統の製本技術）を習得した世界でも稀有な存在である。近年ではロサンゼルスカウンティ美術館（LACMA）で個展が開かれた。

表紙は、蹴鞠にも用いられる燻革（藁と松ヤニの煙でいぶして、茶褐色にした鹿革）。印傳屋上原勇七が制作。白い縞模様は、革に糸を巻きつけ燻べる作業を 7 ～ 8 回繰り返すことによって浮かび上がるもので、素朴な風合いにふりそそぐ光のコントラストが華やか。表紙裏の植物は、三色の革を重ね合わせたモザイク技法を用いており、同じ厚みの革を縁がぴたりと合うように並べてはめこんでいく作業は熟練した技を要する。三方金（三方の小口に貼られた金箔）は、高度な技術を誇る本場フランスの職人の手による。金箔を瑪瑙で何度も磨きをかけることで艶やかで深い光沢を出している。

特製のシュミーズ（本をくるんで保護するジャケット）と外函は、しなやかな仔牛革と染付の桐紙が用いられ、内側には波の文様が刷られている。全行程は手作業のため 2 つとして同じものはなく、函は一点一点に合わせてミリ単位で調整したオートクチュールである。

口絵は色版重ね刷りの王朝継ぎ紙風で、花々が漉き込まれた地のコットン紙に彩を加えている。月と羽ばたく鳥が両面刷りされており、西行の魂が鳥となって飛び立とうとする一瞬が切り取られている。私家本『西行花伝』は西洋の技法と日本の伝統的な素材や色彩が見事に融合し、単なる書物の域を超えた“珠玉の芸術作品”となっている。　（学芸員　冨田ゆり）

コラム　蹴鞠と鞠

蹴鞠は、平安時代末から鎌倉時代にかけて現代に伝わる「蹴鞠」としての形が整えられました。西行が仕えた鳥羽天皇の時期には大納言藤原成通という鞠の名手が現れ、千日鞠を成就したと伝えられます。鞠は、円形に裁断された 2 枚の鹿革のバックスキンを、馬の背革で縫合したものです。縫合の後、小穴から大麦の粒を詰めて球状に膨らませて整形し、表面を鉛白で化粧を施した後、詰物を取り出し小穴を縫合します。中空の鞠は重さ 100 g から 120 g 程です。蹴鞠は松・桜・柳・楓の式木が植栽された鞠場で、鴨のくちばしに似た鴨靴を履いた鞠足 8 人により、鞠の守護神を意味する「アリ」・「ヤア」・「オウ」の掛け声をかけながら行われます。

（非常勤講師　田中潤）

源氏物語図色紙「若菜上」一葉（十一葉のうち）（個人蔵）